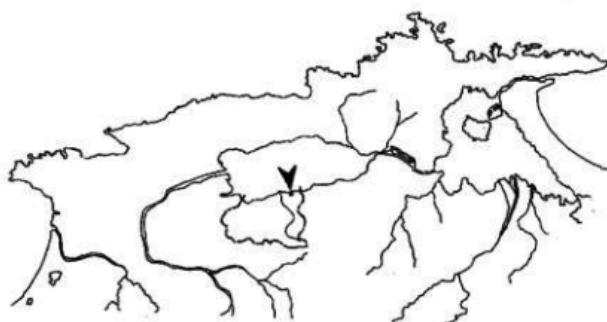


由

島根県宍道町埋蔵文化財調査報告

# 杞石古墳群

— 古墳群と周辺地域 —



1978年3月

宍道町教育委員会



島根県宍道町埋蔵文化財調査報告

# 杞石古墳群

— 古墳群と周辺地域 —

1978年3月

宍道町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は碧南開発有限会社（代表 高木巳一）により進められている、弘長寺住宅団地造成事業にかかる、島根県八束郡宍道町東来特所在（代表 2463-1番地）の古墳群の調査記録である。なお、併せて末尾に、周辺地域の遺跡を紹介して、原始・古代の地域的把握に務めた。
2. 発掘調査は1976年3月から同年8月にかけて3次にわけ、延べ38日にわたって実施し、補足調査は調査開始から77年3月までの期間中、随時実施した。
3. 調査の実施にあたっては宍道町教育委員会（教育長 多根忠義）が主体となり、直接には発掘担当者西尾克己（当時島根大学研究生）、調査補助員大國晴雄（1～3次）、黒山和男、鳥谷芳雄（1、2次）、岡本輝、中浜久喜（2次）（以上島根大学学生）が携った。諸般の事務は同町教育委員会事務局（担当 清原憲道主事）があたり、諸経費については碧南開発有限会社に、作業の遂行には福田組株式会社（代表 福田寿夫）の協力を得た。
4. 本書中の写真撮影、実測図の原書及び報告書の執筆は、すべて上記調査員、補助員が共同でこれを行った。また使用した地図は宍道町役場作成のものと碧南開発の工事予定図をもとに作成した。原則的に縮尺を墳丘-1/200（1号除く）、主体-1/50、遺物1/4とした。
5. 調査にあたっては、島根県教育委員会連岡法聯、横山純夫の両氏には助言をえ、吾郷雄二、川上稔、品川正、福田和夫の諸氏には直接の協力をいただいた。
6. 表紙題字は教育長 多根忠義による。

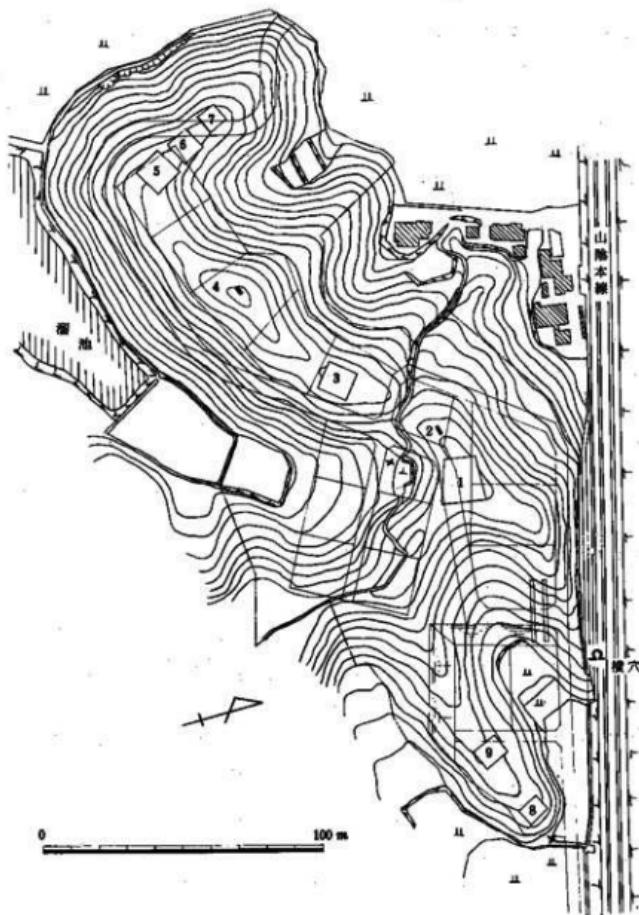
## 目　　次

	頁
I　調査のいきさつと経過 .....	1
II　位置と歴史的環境 .....	5
III　松石古墳群の概要 .....	7
IV　結びにかえて .....	19
〔付〕周辺の遺跡紹介 .....	22

# I 調査のいきさつと経過

## 1. 所在と分布

松石古墳群は、島根県八束郡宍道町東来待 2463-1（代表番地—1号墳）の宍道湖を臨む丘



第1図 松石古墳群分布図（区画は住宅予定地の区画である。×—須恵器表採地点）

陵上に存在する総数10基(墳丘7基、無墳丘2基、横穴1)からなる古墳群である。標高3.0mほどのこの丘陵上には、最高部から西へ1~7号墳が、東側支丘陵先端部に8、9号墳が、また1号墳東側の斜面中ほどにかつて横穴が存在していた。

## 2. 調査にいたるいきさつと経過

76年3月25日の松石1号墳の墳丘測量から始まり、78年3月の報告書刊行までの2年間、調査団が如何にして、またどういう経過でかかわってきたのか、以下概略を述べる。

発掘担当者の西尾に調査が依頼されたのは76年の3月である。それは次のような経緯による。碧南開発によって弘長寺住宅団地造成事業が計画されたのは数年ほど前であった。事業に伴う諸般の手続き、許認可事務などが行なわれるうちに、埋蔵文化財の保護も問題となつた。そこで、同社は穴道町教育委員会に埋蔵文化財分布調査を依頼し、それをうけた同教委の依頼によって島根県教育委員会文化課横山純夫主事は現地での調査を行なつた。そして、ここで初めて、この事業地内に3基の古墳と思われる地点が明らかとなつたのである。(1号と8号墳、他の1基は調査により古墳ではないことが判明した)

この分布調査の結果をもとに町教委と碧南開発の間で協議が行なわれ、上記3基のうち2基を現状保存(実際は8号墳のみ)し、残る1基(1号墳)を事前調査の対象とするという合意をみた。そして、発掘担当者派遣依頼を町教委から受けた県教委はおくればせながらも、上記西尾に調査を依頼したのである。

この時点において、調査計画は現実的にはかなり良質のものと考えられた。特に現状保存計画に組み込まれることは大きな成果であった。そして、これらの事情をふまえて、西尾は、大國、園山、鳥谷と共に第1次調査を開始したのであった。調査は若干の困難(作業員不足、予期せぬ2号墳の出現)を伴いながらも、ほぼ順調に進んだ。そして4月、第1次調査は終了した。だが、大きな状況の変化が起つた。

2号墳が墳丘をもたないものであったことは、この丘陵の他の部分にも同様の古墳の存在を暗示させた。そこで、目的意識的な踏査を行ない、ボーリング棒の使用や、立木の伐採などもあいまって、当初の分布調査では見落とされていた3~7号の5基を発見した。5~7号墳は崩壊が著しかったが、3・4号墳はかなり良好な遺構の残存を予測させた。工事の開始もさし迫っている。調査をせねば…

しかるに、ここで重大な行政的問題が生じた。当初の分布調査で確認されていないから周知の遺跡ではない、従って県教委は調査できないというのである。そして、調査は、「工事中発見」でなければ実施できないとのことであった。重機が動けば、小規模な古墳などはひとたまりもない。

上記4名は、新たに岡本、中浜を加え、あくまでも「悪しき先例にしない」ことを確認したうえで工事開始直前の緊急調査を始めた。碧南開発から作業員の提供、雑費援助を得たことは幸いであった。短期間の、しかも2基同時発掘の困難は次から次へと現われてきた。調査面積の少なさ（3号墳—主体+墳丘の1/4、5・6・7号墳—残存部調査断念）に加え、重機を入れる前日は夜21時まで調査続行し松江へ22時に帰り、翌当日朝7時半からの雨中の調査は成果をきわめて不充分なものとした。かくて、2基の古墳は後かたもなく削平されてしまった。

何とか遺跡に対して、真摯に対峙したことを喜び、公民館だより『穴道公民館』への略報の掲載で書の一端を果たすことができた頃、再び調査依頼が来た。当初現状保存の約束がなされていた8号墳（この時には2基と考えられていた）を削平したいというのである。あれは残すはずではなかったのか。

この計画変更には数々の事由が存在した。具体的には土質、避難路の設置が、また背景には当時の外的諸条件の変化があったようである。第3次調査は7月に始まった。調査は炎天下にわざわざされて能率が著しく低下し、古墳の認定（前述の分布調査時）も重なって必ずしも順調ではなかったが、ようやくにして8月終了した。（調査中、9号墳としていた自然地形の西側に古墳があつて削平されてしまったことが判明し—これを9号墳とする—分布調査自体を遺跡が問い合わせることになった。）

これで、調査の全てが終了したのではない。その後、不充分ではあったが周辺の分布調査を行ない、いくつかの遺跡を発見した。これが、今後の弘長寺地域における遺跡の保護や、地域の歴史を考えるうえの一助にでもなればと願うものである。

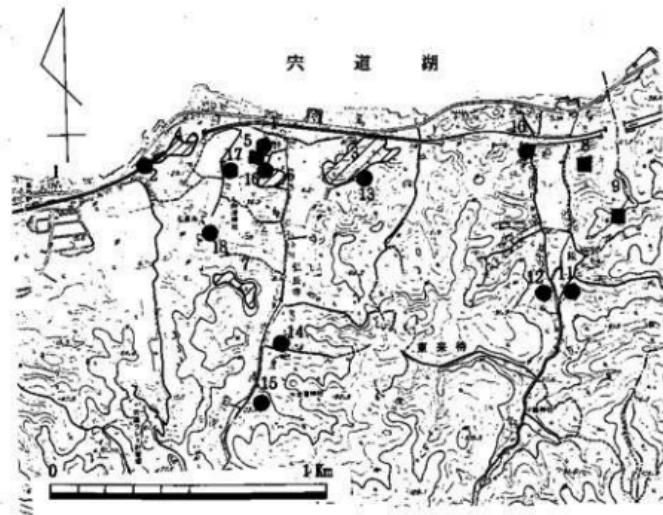
### 3. 経過略表

- 75年 7月 3日 碧南開発有限会社から穴道町教育委員会へ分布調査依頼  
7日 分布調査実施(島根県教育委員会文化課主事 横山純夫)  
3基の方墳と思われる地点を確認  
8日 遺跡発見届提出  
8月11日 調査担当者派遣依頼提出(穴道町教委から県教委へ)  
76年 1月22日 埋蔵文化財発掘届出書提出  
2月21日 埋蔵文化財発掘調査通知書提出  
3月25日 第1次調査開始  
27日 墳丘及び地形測量完了 トレンチ掘り開始(1号墳)  
4月 1日 主体部検出 2号墳発見  
10日 第1次調査終了  
12日 補足調査  
5月10日 3、4号墳の存在が確認される(ボーリング棒による) 5・6・7号墳が以前に存在したことと併せて明らかとなる  
24日 埋蔵文化財発掘届出書提出-9号墳  
6月 5日 第2次調査開始(緊急調査)  
7日 主体部検出  
8日 21時まで調査続行  
9日 7時30分より雨中調査 第2次調査終了  
10日 工事開始 重機により削平される  
21日 埋蔵文化財発掘調査通知書提出  
25日 穴道町公民館報に略報掲載  
7月27日 第3次調査開始  
8月10日 第3次調査終了 事後措置についての伺書提出一町教委から県教委へ  
26日 穴道町松石古墳群の取り扱いについて(通知)(県教委から町教委へ一事を進められてもさしつかえありません)  
11月～ 補足調査(数回)  
78年 3月 報告書作成、刊行

## II 位置と歴史的環境

### 1. 位 置

松石古墳群は、穴道湖の周囲に展開する標高100m以下の低丘陵の一画にある。この一帯は、弘長寺と呼ばれ、国鉄来待駅から東約1kmの穴道湖に向って開く谷全体を含むものである。その谷の東側丘陵先端部にこの古墳群が存在するのである。丘陵は標高30m前後で、水田からの比高は12m



第2図 周辺遺跡分布図

- |           |            |           |
|-----------|------------|-----------|
| 1. 弘長寺遺跡  | 7. 多井古墳群   | 13. 松石遺跡  |
| 2. 三成遺跡   | 8. 大紋古墳    | 14. 多井北遺跡 |
| 3. 松石古墳群  | 9. 鏡北廻古墳   | 15. 多井遺跡  |
| 4. 三成古墳群  | 10. 墓畠遺跡   | 16. 明寿廻遺跡 |
| 5. 弘長寺古墳  | 11. 草ノ上東遺跡 | 17. 寺谷北遺跡 |
| 6. 明寿廻古墳群 | 12. 草ノ上遺跡  | 18. 寺谷遺跡  |

前後、眼下に宍道湖、北に島根半島、北東に現松江市街を一望できる、古墳築造には絶好の地といえる。この丘陵は周辺部と同様に、来待石と呼ばれる石材を含む来待層（粗粒凝灰質砂岩層）を基盤としており、付近には現在も石材の切出場を有する、きわめて石材に恵まれた地の一角にある。古墳群が形成された頃には宍道湖は今よりいくらか入りこんでいたようである。

## 2. 歴史的環境

宍道湖岸における旧石器、縄文時代の様相は必ずしも明らかとなっていない。そのような中で、弘長寺遺跡（2図-1、付篇参照）の石鏟、石礫や三成遺跡（2）の縄文時代後～晩期の土器片は、宍道湖を舞台にした漁労中心の生活を推定させる数少ない例といえる。

弥生時代後期の土器を出土した三成遺跡（2）の存在は、弘長寺の谷においても稻作の開始を示唆するものである。少なくとも弥生時代後期には、この谷において水稻耕作が行なわれており、小川と安定的耕地があいまって、一定の収穫をもたらすようになったであろう。

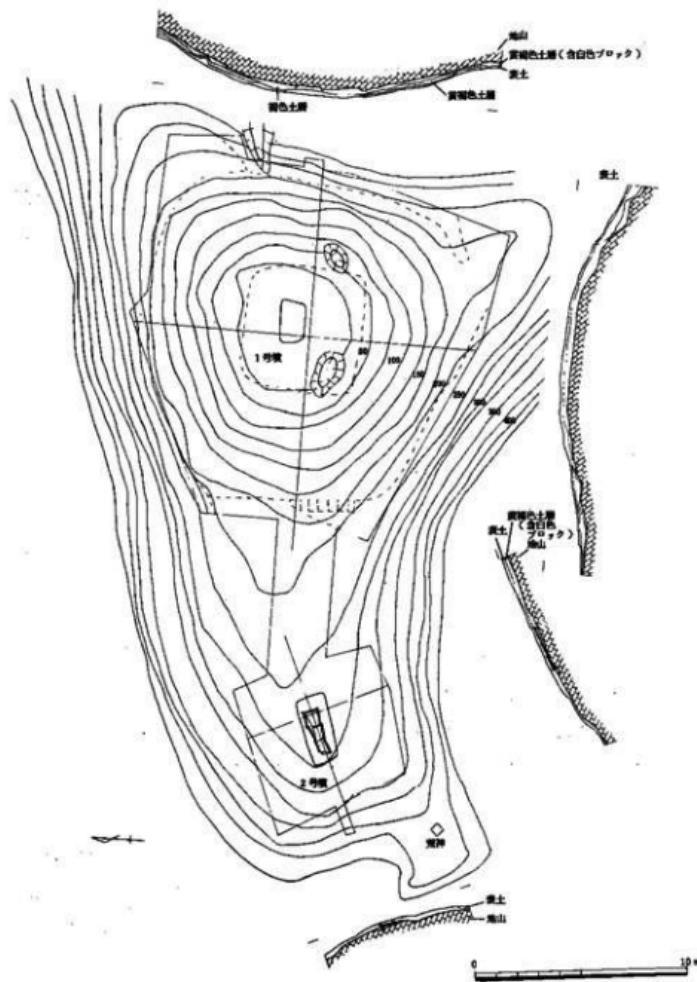
この生産基盤は、古墳時代に入ると前期的な古墳を現出させる。三成古墳群（4）がそれである。この古墳群はすべてが調査されておらず、築造時期も必ずしも明確ではないが、貼石の存在などから古い様相と考えることができる。この三成古墳群も含めて、中期後半～後期初頭にかけて、いくつかの古墳群の築造が始まる。今回調査した松石古墳群をはじめ弘長寺古墳（5）、明寿廻古墳群（6、付篇参照）多井古墳群（7）、隣の谷の大畠古墳（8）などは、おそらくこの時期に属するものであろう。この頃に形成された集団は、次の時期には前代の古墳群の存在する丘陵の斜面に横穴群を築造する。松石横穴、明寿廻横穴などがそれである。同じ頃、散布布地がめだつようになる。多井北遺跡（14）、多井遺跡（15）、明寿廻遺跡（16）、寺谷北遺跡（17）、塚細遺跡（10）、草ノ上東遺跡（11）、草ノ上遺跡（12）、松石遺跡（13）などはいずれも古墳時代後期の須恵器片を中心に表出でき、生活址と考えられる。

また、この地域の中だけでは理解しがたい遺跡、遺物も存在する。湯割を有し、石棺式石室を主体とする鏡北廻古墳（9、付篇参照）や松石横穴出土の金銅装太刀らは、この地域における大きな問題となるものであろうし、石材として多用されている来待石をめぐる諸関係も問題となってくる。また、弘長寺古墳の石棺石材が来待石でないことも見落せない。

律令時代に入ると、さらに寺谷遺跡（18、付篇参照）が加わる。『出雲國風土記』の記載からすれば、この地は出雲國意宇郡拝志郷<sup>（現）</sup>であったと考えられる。

三成遺跡、三成古墳群については『埋蔵文化財調査報告書』（日本国有鉄道大阪工事局、71年）を、弘長寺遺跡、弘長寺古墳については『宍道町誌』（宍道町、64年）を参考されたい。

### Ⅲ 松石古墳群 [1号墳]



第3図 松石1、2号墳墳丘実測図

三方にのびる丘陵の分岐点である最高地点に造られた方墳であり、眼下に穴道湖の広がる格好の場所に位置する。墳形は、狭い尾根を最大限に利用したことにより台形状を呈している。規模は、東西15.2m、南北13.5m(東側)、7.8m(西側)、現存高1.75mで墳頂部は標高3.2mを示す。

古墳築造時における加工状況をみると、墳頂部には一辺5.5mの方形の平坦面をつくっており、整然としているが、墳裾部は自然地形を加工する際、それぞれ異なる技法を用いている。東側では、0.8m幅の平坦面を設けて自然地形を画し、北側では北西隅からの平坦面は東側へ向かうにつれて狭小となり次第に加工がみられなくなる。加工面が流出したことも考えられる。北東隅から西へ向かう裾も同様である。北東隅、南東隅は共に平坦面を設けて古墳を画している。西側では、北西隅、南西隅付近においては溝状の掘り込みによって裾を画しているが、他の部分は傾斜を変換させることのみにより自然地形との区画をしている。南側は後世の小径の存在により明確でないが、他と同様に平坦面を設けていたように思われる。南東隅では東、南側の平坦面が溝状を呈しているが、連続しておらず、その間は傾斜の変換のみがみられる。

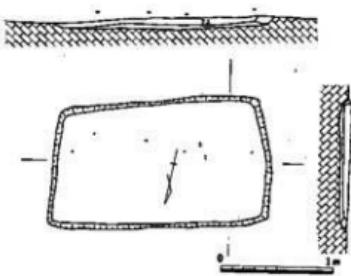
盛土は流失が激しく、頂部で20cm程度残存しているのみである。地山を加工した際の土を利用したようである。旧表土等は認められなかった。(第3図)

主体は墳頂部中央に土塁が認められたことから木棺直葬と推定されるが、流失が著しく、表土下20cmに一部地山を掘り込んでいて、底部から10cmを残すのみであった。(第4図)

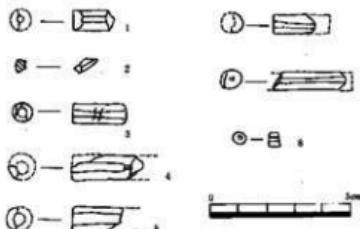
土塁は、主軸を墳丘にあわせて東西に向け、東西210cm、南北110cm、深さ10cmの規模である。地山をわずかに掘り込んだ形で検出されたことから、盛土を施した後に土塁を掘ったものと考えられる。頭部は玉の出土状況から推定するならば東といふことができる。炭化物が少量土塁内に残存

していた。

遺物は、土塁内より碧玉製管玉7片(6個体)、(第5図1~6)、ガラス製小玉1個(7)が出土壤玉は(1)が淡緑色で軟質のほかは濃緑色で硬質である。長さは19mm(3)以外は不明で、直径6~9mm孔径3~5mmで穿孔は両側面から行なっている。すべ



第4図 1号墳主体実測図



第5図 1号墳出土玉類実測図

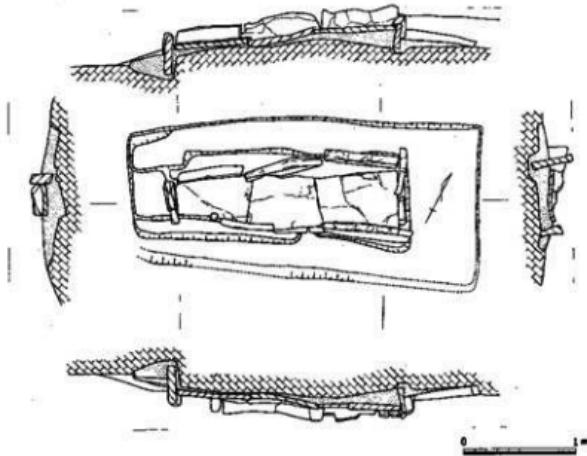
### [2号墳]

1号墳より西に延びる丘陵の平坦地に20m程離れて位置する。地山の加工も盛土も認められないが、築造時には棺を覆う程度の封土が存在していたと推される。主体の主軸は尾根に沿っている。

#### (第4図)

主体は組み合せの箱式石棺で、自然崩壊が著しく、蓋石は消失、また側石もその高さをうかがうこ

て壊れた状態で出土したが、埋葬時に故意に破碎したものか、後世に擾乱されて壊れたのかは確認できない。小玉は淡青色で、直径4mm、孔径1.2mm、厚さ3.5mmの丸味をおびたものである。以上の玉類は土塙底部から12cm上の土塙内褐色土層中にはば同レベルで散在していた。所属時期は明確でないが中期的なものと考えられる。



第6図 2号墳主体実測図

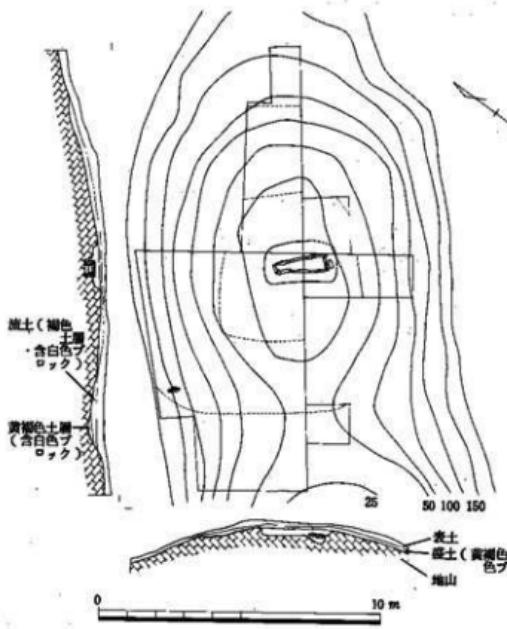
とのできるものはない。(第6図)

主体の築成過程は次のようにある。まず主軸を尾根にあわせて東西に定め、東西310cm(長辺)、南北144cm(短辺)の土を掘り、底には石棺の側石固定のための深さ10cm、幅15~30cmの溝を掘る。東側には溝ではなく、底面のレベル全体を下げている。次に棺の底にあたる部分に土をかためて平坦にし、底石(板状切石)を置く。その後、側石を順次溝に入れて土で固定する。蓋石については不明である。

石棺の規模は内法で長さ200cm、幅50cm(東側ー頭部)~30cm(西側ー足部)であり、側石には厚さ10cm前後の切石を北側に3枚、南側に4枚使用し、底石には厚さ5cm前後の切石を3枚使用している。底面は調査時には東側が16cm程高かった。

石材はいわゆる来待石である。遺物は何も発見できなかった。所属時期は不明であるが、後述の松石横穴内の石棺との類似が認められることから、1号墳よりいくらか時期が遡ることも考えられる。

### 〔3号墳〕



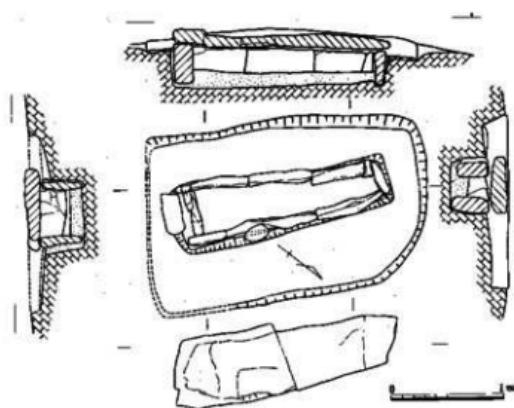
丘陵最高部(1号墳)から南へやや下るところに位置する方墳である。

規模は東西10m、南北11m、高さ1.3mで墳頂部標高3.0mを示す。

古墳築造時における加工状況をみると、まず墳頂部に東西3m、南北6mの平坦面をつくり、地山を方形に加工する際に西側には溝を掘りそれを盛土とする。

地山は東西9.5m、南北10.8m(裾)、東西4.5m、南北5m(頂部)の四角錐台状としている。(第7図)

第7図 3号墳墳丘実測図



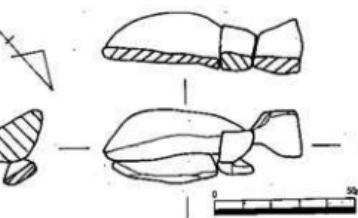
第8図 3号墳主体実測図

主体は組み合せの箱式石棺で主軸を尾根に直交させている。

主体の築造過程は次のようにある。まず墳頂中央部に長さ245cm、幅150cm、深さ20cm、その中に長さ196cm、幅63cm、深さ30cmの二段の土塙を掘る。この長方形の掘り込みに密着させて北東に3枚、南西に4枚の側石を置き、南東には2枚の石を側石の内側に、北西には1枚の石を外側に小口として置いて

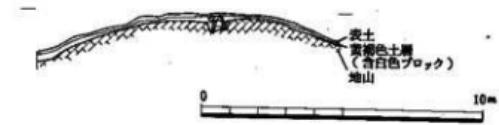
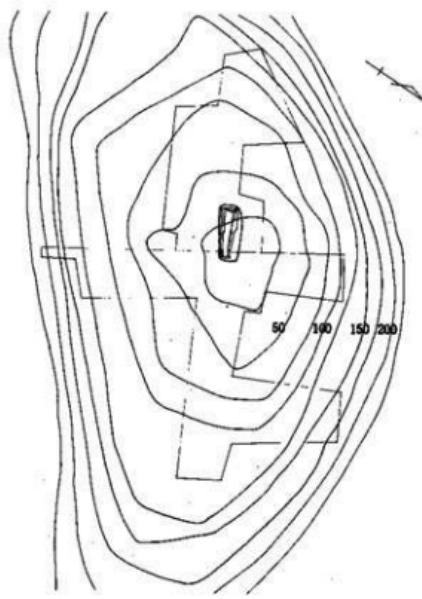
組み合せている。底には若干のくり込みを設け、棺内には土を敷いて床とすると共に側石を固定している。南東棺外の石は36cm×17cm、厚さ4cmの枕石状であるが性格は不明である。

規模は内法で長さ150cm、幅40cm(南東)～14cm(北西)、深さ20cmで、長さ195cm、幅40～65cm、厚さ10cmの1枚からなる蓋石を有する。石材は来待石で、加工はやや難なものである。(第8図)

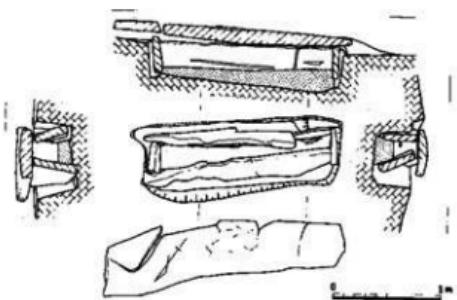


第9図 3号墳石組実測図(1/20) 墳丘の北西隅で地山直上に3枚からなる石組が検出された。(第9図)これは舟形を呈し墳頂に向いて置かれている。規模は長さ70cm、幅25cm、高さ20cmで石材の厚さは4～6cmほどである。石材は石棺と同じく来待石で一部切石である。他の隅は未調査のため不明である。性格は明らかでない。

遺物は何も発見できず、所属時期は明らかでないが加工の状況から2号墳と近い時期と思われる。



第10図 4号墳地形実測図



第11図 4号墳主体実測図

### 〔4号墳〕

3号墳に続く標高3.4mの、松石古墳群中の最高地點に位置する無埴丘墓である。地山も加工しておらず、盛土も認められない。(第10図)

主体は組み合せの箱式石棺で、主軸を尾根に合わせている。

主体の築成過程は次のようである。まず頂部に長さ280cm、幅70cm、深さ30cmの土壇を掘り、底には石棺を入れるためのくり込みを設ける。次に西の側石1枚、東の側石2枚を置き、北の石は側壁の内に、南側の石はその外に組んで小口としている。石材の厚さは6~8cm程度である。石棺の規模は内法で長さ160cm、幅40cm(北側-頭部)~20cm(南側)、深さ20cmである。

石材は未待石で、すべて切石にしており、風化が著しいが、元来は整美なもの

だったと考えられる。調査時には土圧により側石がかなり内傾していた。なお、蓋石も来待石で一枚石である。(第11図)

遺物は直刀・鉤・鉄斧各1で、すべて石棺内で検出された。直刀は棺の中ほどの南東壁に接しており、全長7.80cm、刀身の長さ6.45cm、幅3.3cm(関部)、棟幅0.9cmで、茎は長さ1.35cmである。目釘穴はほぼ中央にあって孔径3mmをはかる。布目痕が一部残存していることから、布に包んで埋納したと考えられる。布は手織の綿と考えられ、密度は経1.6本/cm、緯1.6越/cmである。

鉤、鉄斧は直に置かれたようで、南隅に鉤を上に重なっていた。鉤は鍔の断面が山形を呈し、明瞭な鎗を有する全長1.93cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cm、刃部長3cmのものである。鉄斧は袋總部を有する無肩式で、刃部が袋總部よりやや広くなるものである。長さ1.15cm、刃部幅4.2cm、袋總部は断面をほぼ方形に折り曲げたもので厚さ1.0cmほどある。(第12図)

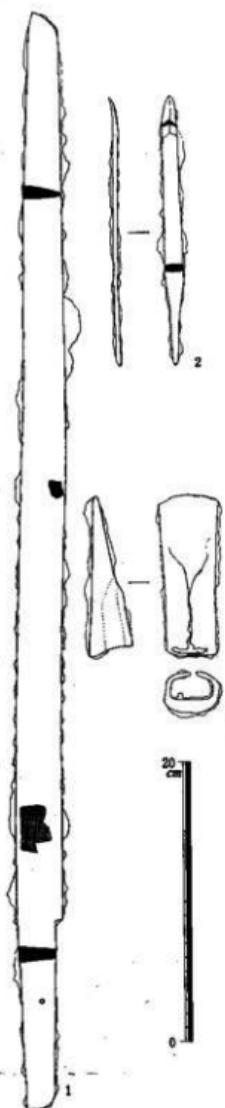
この古墳の時期は明確でないが、鉄器の共伴関係や、その特徴などからして中期～後期初頭頃と考えられる。

### 〔5号墳〕

4号墳の西側に近接して、一边1.1m、高さ2mほどの方墳がかつて存在したと考えられる。主体は付近に切石の来待石が若干散在していることより箱式石棺と推定される。なお、古く墳丘が削平されていて、詳細は不明である。

### 〔6号墳〕

5号墳に接するように造られた方墳と考えられる。一边9m、高さ1.5mほどの規模であったと推定されるが、大半は古く削平されていて詳細は不明である。

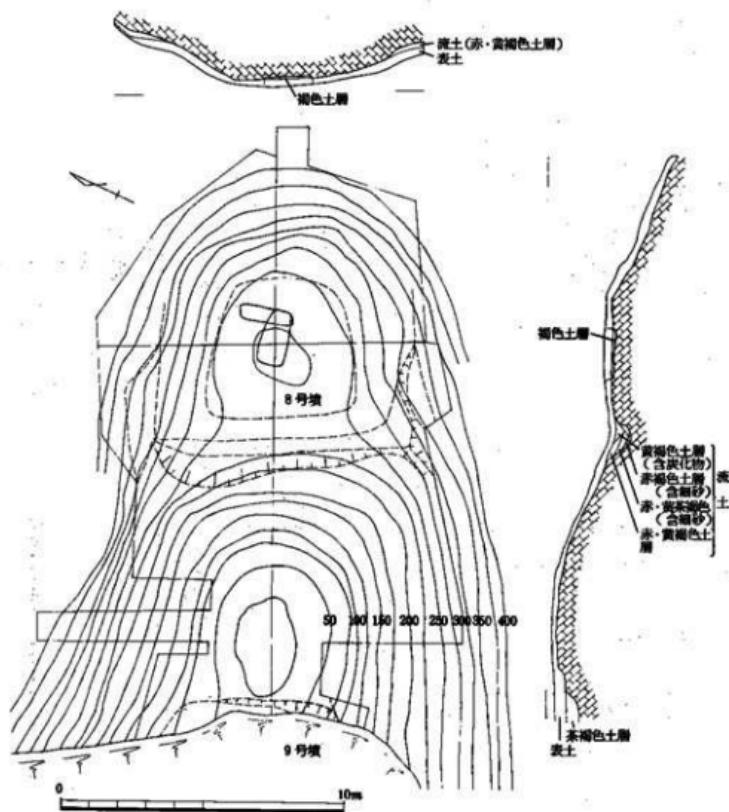


第12図 4号墳出土鉄器実測図

### 〔7号墳〕

6号墳に接して丘陵の先端部に存在した方墳と考えられる。一辺7.5m、高さ1.5mほどの規模であったと推せられるが、大半は古く削平されていて詳細は不明である。

### 〔8号墳〕



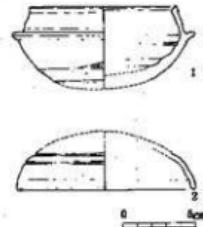
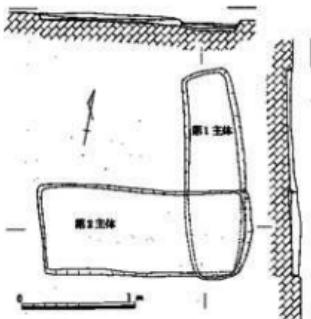
第13図 8・9号墳墳丘実測図

東側にのびる支丘陵の先端に位置する南北 8.1 m、東西 5.8 m、高さ 1.5 m（西側溝より）の方墳である。

墳丘の築成過程は次のような。まず西側に溝を掘って自然地形と切り離し、溝の北側には平坦面を設けて古墳を地山から分離する。北側、東側、南側の墳縁は加工が認められず、あるいは流失したかとも考えられるが、大きな加工はせず、むしろ自然地形をそのまま墳丘の一部として、より大きくみえるようにしたことも推せられる。西側の溝はかなりきちんと掘られており、整然とした規格性を感じさせるものである。幅 1.5 m、深さ 0.7 m の規模である。墳頂部には東西 5.0 m、南北 5.0 m の平坦面を設け、主体をほぼ中心においている。盛土は溝を掘った土を使った簡単なものである。

主体は 2 基ある。第 1 主体が主軸を南北に向けて長さ 18.5 cm、幅 5.0 cm、深さ 3.0 cm（残存部）の規模でまず造られる。その後第 1 主体に直交する東西方向に長さ 18.8 cm、幅 8.0 cm、深さ 3.2 cm（残存部）の第 2 主体が、墳頂のほぼ中央に造られる。いずれも木棺直葬と推定され、土壇は盛土を施した後掘り込まれており、地山に多少くい込んでいる。（第 14 図）

遺物は土塗内からは発見されなかったが、東側墳丘の斜面流土中で須恵器蓋坏の身片が検出された。その出土状況からみて、ほぼこの主体に関わるものと考えてよからう。坏身は立上がりがやや内傾し、口唇ににい段を有し、受部端がやや丸味をおび、受部は溝状を呈するもので、外面の削りは全体の半分程度である。胎土は密であり、焼成は不良である。全体的に古い様相を示しているが、いくらか新しい要素も含まれているといえよう。山陰の須恵器編年によれば、Ⅰ期の特徴と多くの共通点をもつといえる。（第 15 図-1 山本清『山陰古墳文化の研究』、71 年参照）



第 15 図 8 号墳・付近  
表採須恵器実測図

第 14 図 8 号墳主体実測図

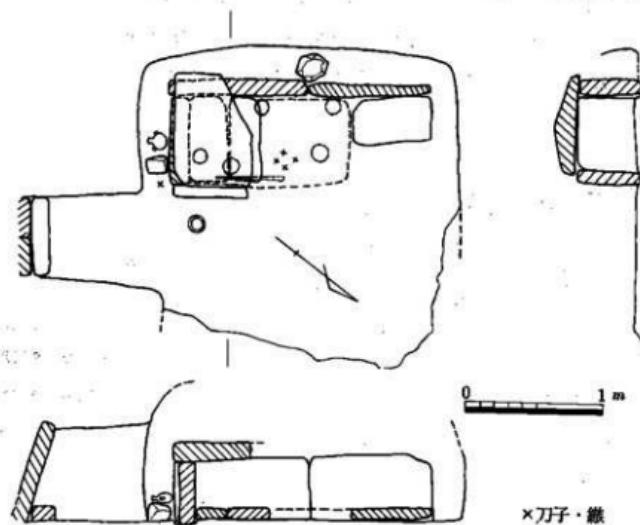
### 〔9号墳〕

自然地形の高まりをはさんで8号墳の西側に存在した、東西9m、南北6m、高さ1m程の方墳である。工事中不幸にして、破壊されてしまったため詳細は明らかでないが、かろうじて残存した溝は、深さ0.5mである。(第13図参照)

### 〔松石横穴〕

1号墳東側斜面の中腹にかつて存在した横穴で、1971年10月からの山陰本線複線化工事中に発見されたものである。これは、当時島根県教育委員会に勤務していた故近藤正氏により緊急調査されたものであるが、松石古墳群を全体として把握するためには欠くべからざるものと考えられるので、不本意ながら横山純夫氏の手許にある実測図の写により横穴を紹介し、あわせて、穴道町中央公民館に保管されている遺物の実測図を掲載するものである。詳細については、いずれの日にか公けにされるであろう資料を持ちたい。

さて、この横穴は天井を含めて、調査時には全体の半分近くが既に削られてしまっていたようであ

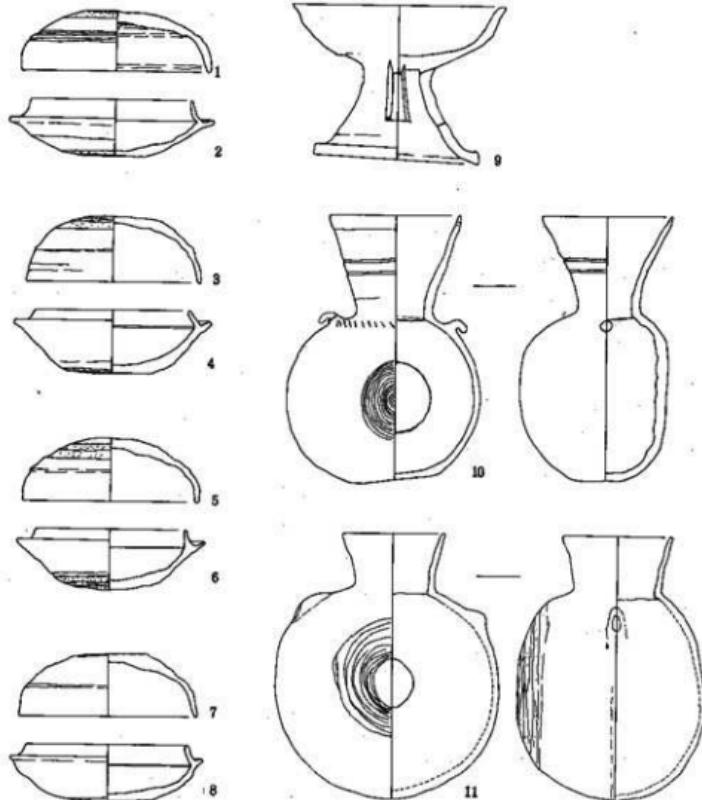


第16図 松石横穴実測図(写-1/40)

の構造はさだかでないが、丸天井のようである。床面は正方形に近く、菱門には切石かともみえる3枚からなる閉塞石を有している。前庭部の構造は不明である。

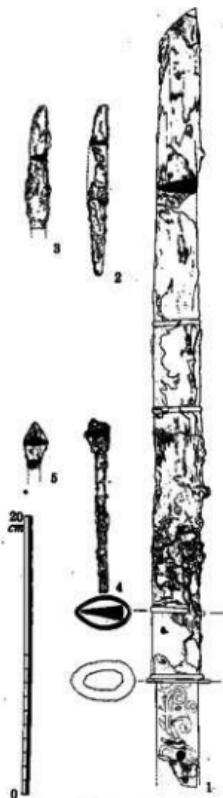
内部には組み合せ型石棺が置かれているが、図からは箱式石棺なのか、家形石棺なのか判断しがたい。石棺は3枚からなる底石を置き、西側に2枚、東側に1枚、天井に1枚以上の切石を組み合せたものであり、整美なものようである。土器が南側を中心にして置かれ、太刀も南に柄部があったようであるから頭部は南にあったと推せられる。（第16図）

遺物は金銅装太刀1、鉄鎌2、刀子2、須恵器多数が現存しており、これは当時の遺物発見届の記



第17図 松石横穴出土須恵器実測図

0 10cm



第18図 松石横穴出土  
鉄器実測図

表1. 松石古墳群一覧表

載と相違ない。

須恵器は蓋環身4、蓋4、高环1で、詳細は省くが、その特徴からみて山陰の須恵器編年中のⅢ期の典型品といふことができるものである。

鉄器は太刀以外は通有のものといえよう。ここで特筆すべきはこの金銅装太刀である。これは柄頭を欠いているため、必ずしもその形式が明らかではないか横穴からの出土は極めて稀であり、しかも優品であることが注目される。法量は刀身部長47.7cm、幅3.0cmで、龍の点彫を柄に施している。(第18図)

なお、この横穴の存在を関知した後、周辺部分に緊急にトレーンチを入れて、横穴の存在の有無を確かめた(第1図参照)が、すでに丘陵の大部分は削平されてしまっていたこともあって、他の横穴は発見できなかった。しかし、まだいくつか存在したと考えたほうがよいものと思われる。付記しておく。

(付) 横穴出土金銅装太刀一覧表(島根県下)

名 称	所 在 地	柄頭形式
中山横穴	能義郡伯太町	主頭
鳥木横穴	安来市鳥木町	"
かわらけ谷横穴	〃 植田町かわらけ谷	環頭
さぎの湯病院横穴	〃 " 植田	"
松石横穴	八束郡穴道町東来待	不明
出雲工業高校横穴	出雲市上塩治町半分	"
安子神社横穴	鄰川郡湖陵町常楽寺下	主頭
立花横穴	大田市大田町立花	頭椎

番号 項目	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳	9号墳	横 1 号
墳 形 規 模 (m)	方 墳 14.7 × 15.2	—	方 墳 11.3 × 10.0	—	方 墳 約 (11×11)	方 墳 約 (9×9)	方 墳 約 (7.5×7.5)	方 墳 7.2×8.7	方 墳 9.0×6.3	—
主 体	木棺直 葬 (1)	箱式石 棺 (1)	箱式石 棺 (1)	箱式石 棺 (1)	箱式石 棺 ?	木棺直 葬 ?	木棺直 葬 ?	木棺直 葬 (2)	木棺直 葬 ?	石棺内 藏
遺 備 物 考	管玉(6) 小玉(1)	遺物な し	遺物な し 舟塗石 組	直刀(1) 矛 (1)	不 明	不 明	不 明	須恵器 环片(1)	不 明	太刀(1) 刀子(2) 鐵鎌(3) 須恵器

## 結びにかけて

### 1. 遺構、遺物とその時期

今回調査した松石1～4、8号墳は、すでに大半が崩壊していた5～7号墳、破壊された9号墳、横穴と共に穴道湖に面した小丘陵上に分布する小規模な古墳群である。各古墳の概要は前述したことろであるから、ここでは古墳群全体に関わる問題を検討したい。

(群構成) 丘陵の中央高所には、その規模・内容からみても中心的古墳と考えられる1、4号墳がある。この2墳の間の低い弛み部には2、3号墳が等間隔で位置し、これらの古墳から東西に派生する支丘陵上に5～7、8、9号墳が、それぞれまとまって存在する。また横穴は、この同一丘陵東側斜面に存在していたことが、山陰本線複線化工事の際わかったものである。つまり、同一の丘陵に古墳と横穴が存在し、しかも継続的に造営された点がこの古墳群の特徴であり、それは出雲東部においては一般的な様相といえる。

(古墳の外部) 1・3・8号墳をはじめとして、墳丘を有する古墳はいずれも尾根に沿って造られており、一辺7～15m、高さ1～2m程度の小規模な方墳である。墳丘の築成は、地山を方形に加工し、丘陵高所側に幅2～3m、深さ1m程の溝を設け、その堆土を盛土とするといういたって簡単な方法による。墓室は盛土を施した後、地山に僅かに掘り込んで設けてある。3号墳墳頂の石組以外は各古墳ともに葺石、埴輪などの外部施設はない。

墳丘をもたない2、4号墳などが存在したことは、他にも無墳丘墓（土塚墓等）を予測させる。

(古墳の内部) 内部主体としては木棺、組み合せの箱式石棺の2種類がある。主体は8号墳(2主体)以外はいずれも1主体と推定され、尾根に平行、あるいは直交する形で墳頂中央部に設けられている。木棺はいずれも主体が入る程度の短いものと考えられる。箱式石棺の構造は、底石の有無・側石枚数・墓室の段の有無等に若干の差異は認められるが、規模・石質・加工などの諸点は多く共通している。これらの箱式石棺は須恵器の副葬が一般化する以前に多くみられるものである。

(副葬品) 1号墳の玉類6、4号墳の鉄器(刀1・鉢1・斧1)、8号墳の須恵器环身片が古墳の遺物の全てで、2、3号墳からは何も発見されておらず、5～7、9号墳については不明である。いずれにせよこの傾向は、質・量共にいたって貧弱といえるが、この時期における小規模古墳としては一般的な様相である。

一方、これらの古墳より後出の横穴からは、金銅装太刀を含む鉄器類・須恵器が多量に発見されており、きわめて豊富な内容をもつ。特に太刀は、横穴からの出土は稀で、しかも優品である。

(時期) 主たる指標となるべき土器のうち、須恵器が8号墳と横穴から出土している。各項で述べたように、8号墳の环はⅠ期の特徴を多く有し、横穴の須恵器は全てⅢ期の典型品である。その他の古墳は、中期後半から後期初頭と推定したところであるから、およそ8号墳に前後する時期のものと推定される。このように当古墳群は、尾根上の古墳から丘腹の横穴にいたるまで時期的に連続するものと考えられる。したがって、この古墳群は、古墳時代中期から後期にわたって丘陵の全域に、薄かぬつながりをもつて集団が墳墓を営みつけたものと考えられる。

## 2. 古墳群とその地域

東は玉湯町林、西は来待という比較的広い谷の中間にある弘長寺、鏡地域は、面積こそ前二者には及ばないがやはりそこに、ある程度の地域的なまとまりが想定される。それゆえ、付篇においてこの3、4の小谷からなる地域内の主要な遺跡を紹介するものである。

松石古墳群が中期後半から後期初頭に形成されたものであることは前述したところであり、その造営期間の中心は小規模古墳が多数群集する以前にあることも明らかとなっている。この時期に形成される古墳群はかなり普遍的にみうけられるが、現在のところその背景が必ずしも明らかとはなっていないのでここでは深く立ち入らない。

さて、この古墳群の古墳相互には、いくらかの相違点が認められる。前掲の一覧表などによれば、1号・4号墳、横穴はこの古墳群の中心的存在と考えることができる。もちろん、古墳自体の性格の変遷は考慮しなければならないが、あえて推論するならば、この三基は家族内有力者の世代墓で他はその構成員の墓といえるのではなかろうか。明寿園古墳群、多井古墳群、弘長寺古墳などは同じ時期と推定され、併行的な古墳の造営が行われているのではないかとも考えられる。そうすれば、これらの古墳群中でこの松石古墳群はその立地・群構成・規模・遺物等からみて、最有力集団の墳墓とすることができないだろうか。

すると、これらの古墳群にいくらか先行しそうな三成古墳群中のいくつかの古墳はどのような背景によって形成されたのだろうか。もっとも、その時間的前後関係はおくとしても、宍道湖周辺のよく似た各谷々には同じような古墳・古墳群の存在が知られているから、これらの大半はおそらく同一の背景によって形成されたものであろうことは推測に難くない。ともあれ、谷間の水田経営に一定の発展が考えられることはいうまでもなく、松石4号墳の副葬された鉄器も農具ではないがその反映とみることもできよう。

また、松石古墳群の形成期にはいくばくかの自立的な集団が形成され、それがひるがえって前述の古墳・古墳群を築造したといえよう。この集団は古墳時代後期になると、遺跡分布図の如く、かなりはっきりした生活圏を残すようになる。そしてこの頃、速度を若干もちらがらも横穴の築造が始まる。

穴道湖周辺の小規模な谷においては各地に見られる「爆発的」増加は認め難く、むしろそれ以前の延長上に横穴被葬者の中心があったと考える。

この頃になると、この地域を超えた対外的な諸関係を表徵するものが現われてくる。稀な金銅装太刀が横穴から出土したことは、そこに政治的関係における賜与を思わせるし、石材として多用される来待石をめぐる諸関係は、製作集団やそれと外部地域との関連を想定させる。とりわけ、門状彌刻が穴道湖周辺に分布していることや、来待石製の石棺の分布がどういう範囲にわたっているか等は、大きな問題となるものである。

また、このことはひるがえって地域内における諸問題を提起する。前述の太刀の存在は、地域内における松石古墳群の集団の卓越性を如実に示すものである。さらに鏡北窓古墳は、鏡の谷のみに技術的、経済的基盤をもっていたことは考え難く、この弘長寺の谷をも含んだ特異な集団の存在を推定させるものとしてうかびあがってくるのである。

まだ論じ尽せない問題も多いが、調査の過程で問題となった諸点について指摘するにとどめる。

### 調査をめぐって

その後、私たち6人はこの地域をいくどなく歩きました。そしていくつかの遺跡を新しく発見し、また、この附近から出土した遺物なども実測しました。

もちろん、この間何の問題もなかったわけではありません。私たちは、共に考古学を学ぼうとする一人一人の集まりでしたから意見は必ずしも一致しませんでした。それだから、いくどなく、話し合いを重ねたのです。こうした内部事情もあいまって、実際の調査は失敗の連続でした。迫り来る重機の音の中、夜間、雨中の作業は、遺跡にも私たちにもつらく、耐えがたいものでした。

そんななかで、私たちの喜びは、公民館報に略報を掲載して、町民のみなさんにこの古墳群の存在を知ってもらえたことでした。

いろいろなことがありました。松石古墳群はもうなくなり、おう土色の山はだはやがて住宅団地に変わってゆくことでしょ。

しかし、昔から流れる谷川の水は、用水となって田んぼを潤し、秋には稻穂がゆれるみのりをむかえるという日々のくらしあは、今も変わらず続いているようです。



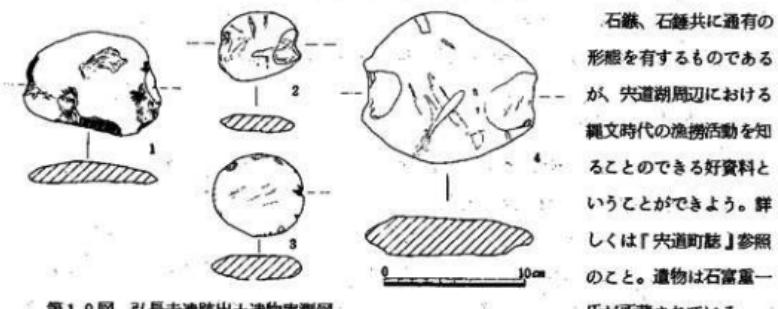
(編集後記にかえて)

## 〔付〕周辺の遺跡

### 〔弘長寺遺跡〕

この遺跡は、北は宍道湖をのぞみ、背後に丘陵をひかえた低地に立地する。現在は畠地となっており、遺物包含層はかなり浅く、耕土中にあるようである。

発見は大正の末頃で、耕作中に巻貝と共に多量の石器が出土したとのことである。大半が散逸しており、現在残っている遺物は、磨製石斧、石錐、黒縞石石錐である。



第19図 弘長寺遺跡出土遺物実測図

### 〔明寿廻古墳群〕

この古墳群は、弘長寺川をはさんで松石古墳群のある丘陵とあい対する標高30m程の丘陵上に位置する。各古墳はいずれも方墳で、丘陵の突端から一直線上に4基並んでいる。

1号墳は丘陵の突端部に位置し、東西8.5m、南北10m、高さ1m程度の規模である。2号墳は1号墳の西に接しており、規模は東西7.5m、南北8.5m、高さ1.5m程である。3号墳は2号墳からやや離れて9mの間隔で、東西8.5m、南北8m、高さ1m程のものである。4号墳は3号墳に接するように、東西8.5m、南北7m、高さ

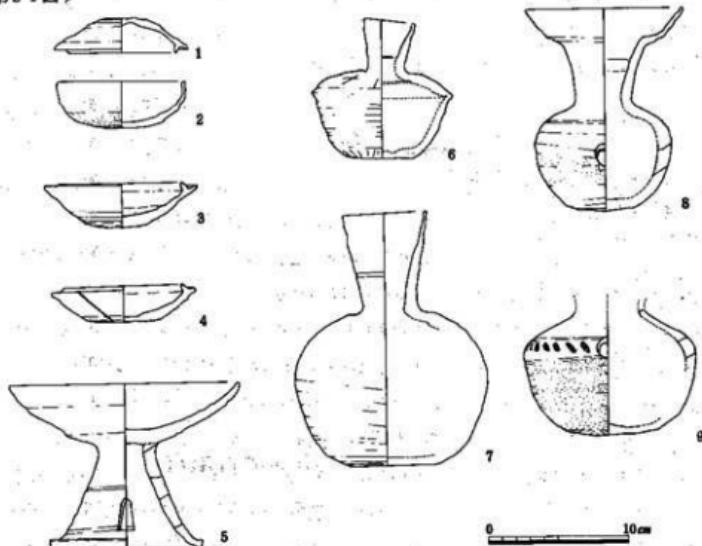


第20図 明寿廻古墳群分布図

1 m 程の規模で造られている。1・2号墳と3・4号墳の間はテラス状である。

横穴は、元来数穴が存在していたようだが、丘陵南側の公園造成の際に大部分廃されたよう、現在は1穴のみが開口して残っている。この横穴は、先の4号墳から西へ30 m 程の南側斜面にある。土砂の流入が激しく、内部構造は明らかでない。遺物はいずれの横穴から出土したものかは不明であるが、宍道町中央公民館に蓋碗1、蓋環の身2、高环1、長颈瓶、短颈瓶各1、罐2の完形の須恵器が現存する。形態の詳細は省略するが、罐の1例はⅢ期に、他は全てⅣ期の中頃のものと考えられる。

(第21図)

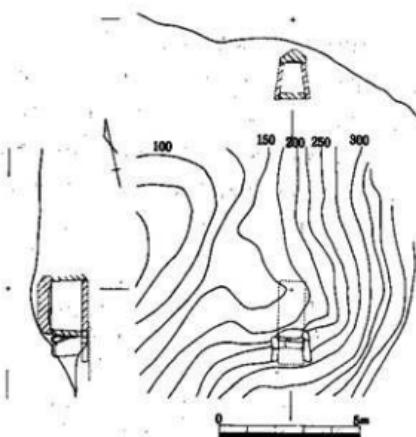


第21図 明寿通横穴群出土須恵器実測図

### 〔鏡北廻古墳〕

古く開口した石室を有するこの古墳は所在は知られていたが、その詳細は明らかでなかった。今回の調査期間中にその特異性がわかり、また松石古墳に隣接するものであるのでここに紹介をする。

この古墳は、玉湯町に東を接する東来待字鏡の小支谷に面した尾根直下のかなり高所に位置する。墳丘は尾根側に幅1 m 程の溝を掘り、その排水で石室を覆った簡単なもので、小規模な方墳である。規模は南北13 m、東西10 m、高さ2 mである。地山は來待層である。(第22図)



第22図 銚北廻古墳墳丘実測図

石をはめ込むための切込みが各々の石に設けられている。一方、閉塞石は横7.2cm、縦10.1cm、厚さ2.0cmの1枚の切石で、前方中央部には、門状の陽刻が施されている。玄室の閉塞はこれに加え、幅3.0cm、厚さ2.0cmの棒状の石を併用したものと考えられる。

蓋道には切石の側壁と底石がそれぞれ1枚存在するが、天井石は斜面に転落している。長さは底石により8.0cm、側壁によれば10.0cm程と推定される。蓋門については不明である。

出土品は開口が古いうえに、所伝もないためまったく不明である。

さて、この古墳で注目されることは陽刻をもつこと、石棺式石室であることの2点である。このうち、石室内の帶状陽刻は山陰において他に類例をみない初見のものである。また、閉塞石前面の門状陽刻はこれを合せて5例のうち、宍道町3、松江市1、斐川町1例と宍道湖周辺部に分布しており、きわめて興味深い事実を示す(註)。石棺式石室が出現東部と異なり妻入のものであることもまた見逃せない事実である。時期を判定する材料は乏しいが、内外の構造や加工状況から古墳時代の終末近くのものと考えられる。(第23図)

(註)門状の陽刻を有する他の古墳は以下の通りである。

八束郡宍道町伊賀見古墳(『宍道町誌』、64年)

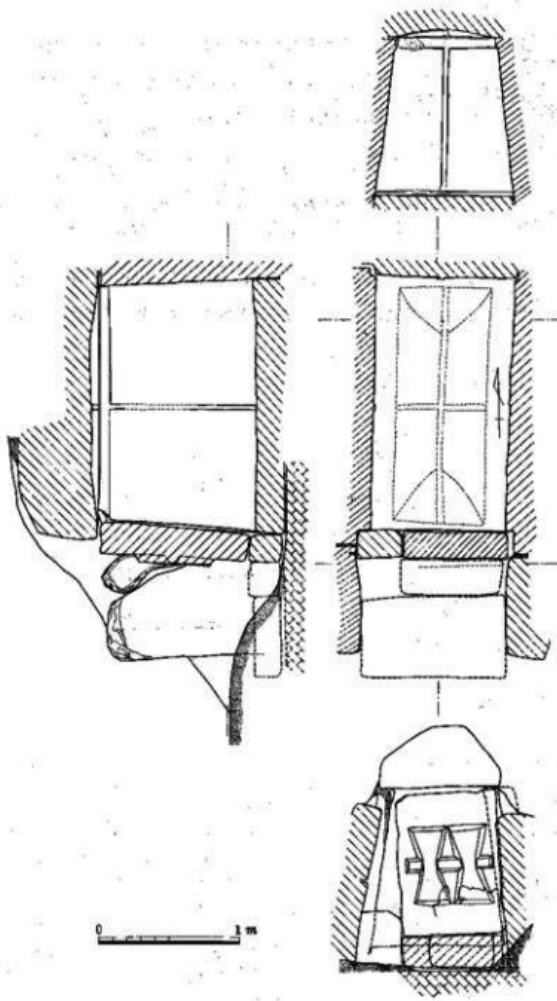
〃 下の空古墳(同上)

簸川郡斐川町出西丸子古墳(『山陰古墳文化の研究』、71年)

松江市浜佐陀町北小原横穴群第2号穴(『島根県埋蔵文化財調査報告書』IV集、72年)

内部構造は、ほぼ真南を向いた小型の横穴式石室で、各部分を來待石の切石1枚ずつによって構成しており、いわゆる石棺式石室である。

玄室は妻入の構造で、長さ180cm、幅100cm、高さ115cmで細長く、まさに家形石棺状である。天井石は内外共家形に加工し、内側は四柱式である。各壁には幅3cm及び7cmでT字状に、天井の家形四柱は3cm幅でそれぞれ陽刻を施している。玄室の入口には閉塞

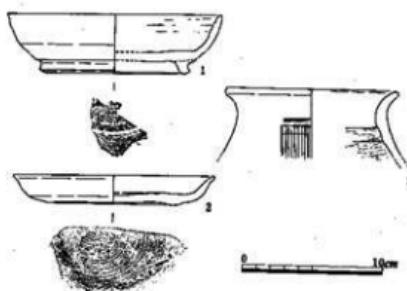


第23図 鏡北廻古墳石室実測図(1/40)

## 〔寺谷遺跡〕

曹洞宗弘長寺の駐車場から隣接する墓地にかけての場所であり、新しく発見したものである。駐車場の造成により土器の表採が可能となったもののようにあり、その性格は必ずしも明らかではないが、墓地への登り道の中間に焼土面が径40cmほどにわたって認められることから、炉を有する住居址であった可能性が強い。寺谷の最奥部のゆるやかな斜面に北面して展開する集落址と考えることができよう。

土器はほとんど小片であるが、須恵器には高台を有し、糸切底をもつものがあることや、その器形からしておおむね奈良時代から平安時代初頭にかけての時期のものと推定される。(第24図)



第24図 寺谷遺跡出土土器実測図

表2 周辺遺跡一覧

名 称	種 别	地 在 地	地 目	備 考	名 称	種 別	地 在 地	地 目	備 考
1 弘長寺塗跡	敷石地	東来寺付近	寺	石器	10 墓 焼 通 道	敷石地	東来寺付近	寺	須恵器
2 三成遺跡	×	×	×	×	11 草の上東遺跡	×	×	×	×
3 松石吉塗跡	古墳群	×	×	山林	12 草の上遺跡	×	×	×	須恵器、玉脚器、土器
4 三成古塗跡	×	×	×	山林	13 松石塗跡	×	×	弘長寺	須恵器
5 弘長寺古塗	古 墓	×	×	山林	14 多井北塗跡	×	×	×	須恵器
6 明母塗古塗跡	古墳群	×	×	山林	15 多井塗跡	×	×	×	須恵器、土器
7 多井古塗跡	×	×	×	山林	17 寺谷北塗跡	×	×	×	土器
8 大坂古塗	古 墓	×	×	山林	18 寺谷塗跡	×	×	×	須恵器、土器
9 親北塗古塗	×	×	×	山林	19 明母塗跡	×	×	×	須恵器



松石古墳群 1号墳～7号墳遠景（西から）



松石古墳群 8号・9号墳遠景（1号墳から）



松石丘陵の現状（南から）



1号墳と2号墳(西から)



1号墳主体(東から)



2号墳主体(東から)



3号墳主体（西から）



3号墳舟形石組



4号墳主体（北から）



4号墳遺物出土状況



9号墳墳丘（北から）



9号墳墳丘と主体（西から）



9号墳主体（西から）



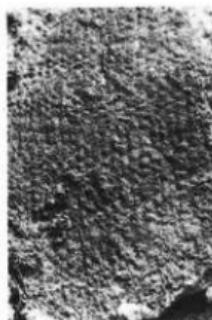
4号墳直刀



松石横穴直刀



4号墳・鉢と斧



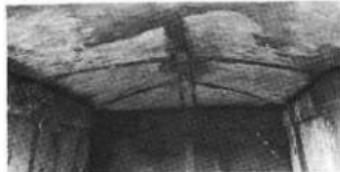
4号墳直刀の布目



1号墳玉類



鏡北廻古墳・玄門



鏡北廻古墳・玄室

1978年3月 印刷・発行

島根県宍道町埋蔵文化財調査報告

松石古墳群

-古墳群と周辺地域-

編著 松石古墳群調査員・補助員

印刷 松栄印刷

発行 宍道町教育委員会

島根県八束郡宍道町